

弔詞 ——職場新聞に掲載された一〇五名の戦没者名簿に寄せて——

ここに書かれたひとつの名前から、ひとりの人が立ちあがる。

ああ あなたでしたね。  
あなたも死んだのでしたね。

活字にすれば四つか五つ。その向こうにあるひとつのいのち。  
悲惨にとぢられたひとりの人生。

たとえば海老原寿美子さん。長身で陽気な若い女性。  
一九四五年三月十日の大空襲に、母親と抱き合って、  
ドブの中で死んでいた、私の仲間。

あなたはいま、  
どのような眠りを、  
眠っているのだろうか。  
そして私はどのように、さめているというのか？

死者の記憶が遠ざかるとき、  
同じ速度で、死は私たちに近づく。  
戦争が終わって二十年。もうここに並んだ死者たちのことを、  
覚えている人も職場に少ない。

死者は静かに立ちあがる。  
さみしい笑顔で、  
この紙面から立ち去ろうとしている。忘却の方へ発とうとしている。

私は呼びかける。  
西脇さん、水町さん、  
みんな、ここへ戻って下さい。  
どのようにして戦争にまきこまれ、  
どのようにして  
死なねばならなかったか。  
語って 下さい。

戦争の記憶が遠ざかるとき、  
戦争がまた  
私たちに近づく。  
そうでなければ良い。

八月十五日。  
眠っているのは私たち。  
苦しみにさめているのは あなたたち。  
行かないで下さい 皆さん、どうかここに居て下さい。